J Intl Cooper Agric Dev 2019; 17: 1

Journal of
International Cooperation for
Agricultural Development

巻頭言

今後の食料生産と国際農業協力

縄田　栄治
京都大学大学院農学研究科長

「年間24億トン」。この数値を聞いて、何を思われるだろうか。2014年から2016年の3年間、イネ・コムギ・トウモロコシ、いわゆる３大穀類の全世界の総生産量は、24億トンを超えている。「年間24億トン」がどのくらいの量なのか、あまりにも膨大でとらえにくいが、大ざっぱに言って、1年1トンの穀物でほぼ4～5人の人が食べていける。即ち、「年間24億トン」は、100億人かそれ以上の人口を養うことが可能な生産量といえる。2014年から2016年は、エルニーニョ現象が現れたため、この間、世界各地で異常気象が報告され、旱魃や洪水なども頻発し、農業被害も多かった。にもかかわらず、地球規模では比較的安定した穀物生産が実現している。他の多くの主要食用作物の生産もほぼ同様である。多くの要因がこのことを可能にしたと思われるが、農業技術の進歩は間違いなく大きく寄与しているであろう。また、農水省農業環境研究所の最近の発表によると、地球温暖化の悪影響は既に現れているという。地球温暖化の影響が徐々に現れてくる中での高く比較的安定した穀物生産の実現は、ある程度温暖化の影響を考慮した技術革新や政策実行がなされていることを示している。

ただ、上のような状況は、あくまで地球規模で農業生産を見た場合である。地域レベル、国レベルでは、相変わらず生産が不安定で飢饉が頻発し、国際連合国際食糧計画（World Food Program、WFP）の食料支援活動は、毎年、活発である。頻発する飢饉の原因は様々であり、地域によっては民族紛争や宗教紛争を含む政治的な不安定性、あるいは人口急増の影響も大きいが、砂漠化を含む気候変動による生産の減少・不安定化も主要な原因の一つであろう。地域紛争の解決には、国際連合や他の多国間の枠組みなど、国際的な協力が欠かせないが、多くの場合、短期間での解決が困難で、国際社会の持続的な支援が必要である。一方、地域レベル、国レベルでの安定した農業生産は、ある程度、地域の安定化をもたらすことが期待される。反対に、不安定な農業生産は紛争地域の政治的安定をより一層遠ざける懸念がある。地域レベル、国レベルでの農業生産の安定は、今後の地域の安定に必要不可欠であろう。この意味で、農業分野の国際協力は、地球規模での安定した穀物供給を達成した今も重要であるし、気候変動や人口増加、現在の農業が大きく依存する化石エネルギーの枯渇など、安定した穀物生産を脅かす問題が次々と顕在化してくる近い将来において、より一層の重要性をもつと思われる。本誌が、農業分野の国際協力の一助となれば幸いである。